

Title	傳統の周圍：芭蕉・西鶴
Sub Title	The traditions : around Basho and Saikaku
Author	森, 武之助(Mori, Takenosuke)
Publisher	慶應義塾大学文学部藝文学会
Publication year	1955
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.4, (1955. 2) ,p.1- 15
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00040001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

傳 統 の 周 圍

——芭蕉・西鶴——

森 武 之 助

新しい文學は、それが起る多くの動機と必然性の結實であり、單に、前時代への反抗とか反動とか云ふ語で解説する事は、危険である。文學作品を劃一的な、荒いザルで濾してみたとして、滓をとゞめ純分を漏すと云ふ、その文字通りの意味に結果する事が、屢々、起るものである。

文學作品は、言語的、思想的、社會的背景に於ける複雑な立體的層疊物であつて、その研究鑑賞面は、各時代、各個人の様性によつてこそ作品を新しく生かし續けるのである。そして、この研究鑑賞者達の、凡ゆる方面からの投光により、文學作品は、徐々に眞の全貌を現して來るのである。光は、常に角度を變へて、表からも裏からも側面からも、當てたいものである。

殊に、古典に於ては、文學具體の科學的な調査、蒐集が、最初の絶對的要請であるが、この困難を克復し得たとしても、この層疊物の總體積の考察、解明の義務を免れる事は出來ぬ。それも、型式の分析と云ふやうな段階はともかく、その invention や fictionality を論ずる段階に差掛ると、忽ち、各自の批判、評價の問題とからみ付き、解き放ちの困難な多様性を示して來るのである。文學の考察は、直ちに文藝論を豫想させるが、文藝論から導き出されるものではない。これから幾度となく相似する、或は矛盾する論議が、續けられるであらう。が、とまれ、長い長い時間と、多くの人々の投光を必要とするものなのである。その妥當性は、或る日、確かめられるかもしれないが、一科學の如く、妥當性の確認に發足するものではない。そして、最後に浮び上つた像が aphroditic であつたか、鼻輪を貫いた土人女であつたか、それを今日より考へる事は、復しても問題を循環させるに過ぎない。これは、古典を、をろがむ人々の中

の最も貧しき者が、十七世紀の神々のきびすに奉つた、十二燈の一つである。

I

「油槽」(寛永二十年刊)の卷末に、松永貞徳は、その誹諧式目を、十首の短歌にして載せてゐる事は、周知の事である。この様に、式目を和歌形式に整理して現はす事自體は、貞徳の創始ではなく、高山宗砌の數十首の式目歌に、その先例が認められるのであるが、この貞徳の十首は、ごく簡単に、彼の式目の中心となつた連歌傳統、即ち、應安新式、和漢篇、漢和法式より成る縁が抽出できるし、連歌から誹諧への緩舒の限界も、一通り分明する便利なものである。又、一方、全著作を通じて批評の語のみ多く、自説誹論の非常に少ない彼を知る上に、興味深いものがある。

この式目歌の末尾に付された文中で貞徳は、「私にはあらず。先達の被用し分を思ひ出て十首の哥につらね侍物ならし」と斷りを付してゐるのである。この態度は、「俳諧御傘」(慶安四年刊)の序に於ては、より詳細に註釋されて、「これは應安の新式を立て、一座一句の物をば二句にさだめ、七句の物をば五句になすやうの事のみにて、わたくしの新法を一つもいだし、誰もしりたる和漢のごとくあひはからふものなり」と記されてゐる。

誹諧が、和漢聯句に準ずるものであると云ふ論は、徳元の「誹諧初學抄」(寛永十八年刊)にも、立圃の「はなひ草」(寛永廿年刊)にも、又、維舟の「毛吹草」(正保二年刊)にも記されてゐるから、特別に取上げる事はないが、注目されるのは、貞徳が繰返し、その誹諧式目が私の意見で出来たものではない點を、強調してゐる事である。中世の藝術觀に於て、先達よりの傳習は絶體であつた事は、こゝにくだく例證するまでもない事であつて、私にそれを破壊し去る事は、大きな罪惡であつた事は云ふまでもないのである。師傳の尊重や、世俗倫理の文藝への混入など、中世臭が強く特徴付けられる貞徳の人と爲りを想へば、彼がこの罪惡に對して謹慎であつた事は想像されるのであるが、「是を此まゝ置侍らば、はらぐろなる人有て、誹諧新式など申事もや侍らん」とまで心を配つてゐる點よ

り考察すると、私に非ずと云ふ辯辭が、單なる謙虚のみ示すものではないらしく思へて來るのである。世人より、私案を公にしたと批難される事は、誠に恐しいのであるが、それに伴ひ、この批難は同時に彼の示した式目の價值を、著しく低下させる結果になる事を、彼は知つてゐたのである。「私の新法を一つもいじらず」と、彼は云ふが、この式目歌を、和漢篇、漢和法式と比較検討すると、實は、私の許容が絶無ではないのである。

春と春。五句去也。問云、誹諧は和漢のごとく去嫌と云ひしに、何とて同季を七句は嫌給はぬぞや。答云、是不レ私、玄旨法印、紹巴法橋などの誹諧に、季を五句去になされしを聞ならひて昔より仕るに近年、宗祇の獨吟の誹諧を見侍れば皆五句去にして有なり。先師たちのせられしも定て此故にてありつるやと、いよ／＼殊勝に思はれ侍（御傘卷一）

と、諄々、傳統を振翳して、世人に迫るものがある。であるから、私に非ずと云ふ語は、應其の「無言抄」に對する彼の批難の執拗さと考へ合せると、これは謙虚と云ふより、むしろ傳統の力に依存しての強壓とみるべきものであらう。一方、世人は、この強壓故に、彼の式目を喜んで受入れたのである。先達の傳統と云ふ解説があつてこそ始めて、絶體の信賴感が湧き上つて來るのであつた。

柿園に報恩藏を建立した貞徳は當然としても、傳統に反撥する事によつて結實した、と説かれてゐる作家の間に於ても、この點に、意外の脆弱さが發見されるのである。

菅野谷高政に替つて、「中庸姿」の論難に立向つた大坂談林の雄、岡西惟中は、その「誹諧破邪顯正返答」（延寶八年刊）に於て、談林の宗主、西山宗因を辯護して、「忝も梅翁老師は、壯年の比より昌琢老人に隨ひ、多人連歌の道に功あり名遂て、人にもゆるされ、攝家清花のすえにもつらなり、達人名匠の座にもなをり」たる人で、高政とは異り、「天滿神を傾城にとりなし、帝王に犬のぼりをなめさせ」などする事はない。その證據には、

いつの比か予が句の内に、釋迦はやりもち供につれつゝ、とつかまつりければ此句あまりにや、一代教主の如來、心すべき事也と脇書し給ひぬ、又いつの比にか、よぶこどりの句に、此鳥秘鳥也。とかうに不及と判じ給ふ。大事のものは大事に、もたいなきものもたいたくし給ふ。

と、記してゐる。即ち、宗因は、文藝作品の上に於ても非倫は無く、且、中世文藝の傳統にも忠實な人であるから、批難は當らぬと云ふ論法である。この文の、「いつの比か」の年月が明確に指定出来ぬ恨みは残るが、延寶期とすれば、既に古今傳授などを蔑視した長流も、茂睡も、契沖も、その主張を公にしてゐた頃であるのに、惟中を信すれば、宗因は、「此鳥秘鳥也。とかうに不及」と判したと云ふのである。又、「此句あまりにや、一代教主の如來、心すべき事」と云ふ如き言説は、論難の主である中鳥隨流の「和歌灌頭、神道灌頭と云事あり。是にあづからざれば神祕のまことを人のしる事にあらず」と説き、「伊勢の神と紙屑かいのか」と一昧分身也と云ふ事か（中略）神罰はのがれぬ物ぞ」と怒る態度との間に、本質的徑庭は認め難いのである。「消閑雜記」「一時隨筆」等を一讀すれば、惟中自身が、元來、中世傳統に忠實な者であつた事は分るが、この宗因辯護論は、當時、反傳統の烙印を甘受する事は致命的創傷であつた事を示してゐるのである。

II

不可侵の傳統、それに従ふ搖ぎなき倫理觀と共に、最も根深き蔭を日本文藝に投げかけてゐるものは、所謂、幽玄美に對する信仰である。

幽玄美への理解は、俊成、西行、心敬等の作品群に具現されてゐるし、又、多くの解説もなされてゐて、その獲得を阻格する困難は、少ないやうに見られるが、問題になる點は、それに纏綿して離れぬ、信仰の存在である。この原因は、進展した幽玄の中心と成つた靜寂感、無常感による宗教的境地への類似の爲であらうか、幽玄美は、結局、無絃の琴の響であり、無韻の詩の象徴であつて、その眞の理解は、輕々に、え現す事の出来ぬものであるとする、神祕觀である。かゝる霧が晴れてこそ、近世の文藝復興が起るのであるが、この信仰の根深さは、いつの時代に至つても、これに抗する者を卑しとし、この神祕の教義を説く者へは賞讃を惜しまぬ事に、明かに現れてゐるのである。

前述した宗因を中心として、寓言に遊ぶ文藝を呼稱し、その題材に於ては廣く現實への擴充を企て、このまゝ進展すれば、やがては近世の寛濶を正しく生かし得る文藝にまで至るかと思へた談林誹諧も、延寶末年には、早くも澁滯を示して來たのであつた。この打開の爲に、眞摯な努力を盡した人々に、椎本才膺、池西言水、上島鬼貫、松尾桃青等があつた。そして、これらの人々は、それ／＼新しい境地を探り當てたもののやうである。が、より新しい境界を探り當てた點に於ては、同一の功と看做す事は出來るとしても、それを發展擴大して行つた才は、芭蕉一人のものであつた。

談林誹諧を、一步推進させる爲の一策として、漢字、漢語を濫用すると云ふ、方向があつた。漢語は、貞徳の云ふ「誹言」であるから、その使用は、別に珍らしい方向ではないが、當時の談林の人々の使用法は、和歌、連歌との識別の機能を越えて、行詰りを打開して、新境地を開拓しようとする焦慮が試みさせた一策であつたのである。

蓬萊哉琥珀の橘珊瑚の海老

初夢や猿が齒固枕の今朝

餅屋方杵が朝寐や四方春

この程度の句ならば、わづかの異體感を持つのみで、理解への道は開けてゐるが、

若菜や今朝俎板時鳴レ之

地龍こみよ浮レ水嵐吹レ月

歸圓寂靈供盛物霧煙

燒鮎あじハ于レ石漱

冬フユ天猫ノ眼卵

などの句に至ると、啻に漢語の濫用によつて起る奇異の姿を誇示してゐるだけのものである。勿論、末の二句は、和漢聯句であらうが、決して準確正しきそれではない。貞徳が、誹諧式目の準繩とした和漢は、皮肉にも、彼が嫌惡した奇邪の姿に於て現れて來たので

ある。

既に寛文十二年、いち早く「貝おほひ」を撰んで、流行に對しての敏捷さを示した芭蕉も、勿論この當流の新傾向を取入れる事に、後れるものではなかつた。「東日記」、「武藏曲」、「虚栗」等に散見する漢語調の句を、一つ一つ説くまでの事はないのであるが、唯、注目される點は、この種の芭蕉の句は、單なる奇異の姿の爲のみのものでもなく、且、漢詩句の無差別の裁入れと云ふ事で、説明の終らないものを含んでゐる事である。

夜ル竊ニ蟲は月下の粟を穿ツ

槽の聲波ヲうつつて陽氷ル夜やなみだ

髭風ヲ吹て暮秋歎ズルハ誰が子ゾ

氷苦く偃鼠が咽をうるほせり

これらの句から感得されるものは、共通して内面に湛へられてゐる、色深い苦澁である。漂ふ、何物かに對する重い恨みの詩趣である。これは、他の談林誹人の漢句裁入れのものからは、見出し難い特色である。流行に従つて歩み續けてゐた芭蕉は、漢語濫用の道程に於て、李杜の詩趣の一傾向と、自己の嗜好する方向との合一を、發見したのである。確かに、苦澁は李杜のもつ一傾向ではあるが、決して、それが李杜の詩趣の全部ではないはずである。が、この日本の一誹人は、異國の文藝を觀照して、その有する一面の苦澁を發見する事に於て高い價を認めたのであつた。こゝに至れば、彼の道は、坦々と開けて來る。

手づから雨のわび傘をはりて

世にふるもさらに宗祇のやどり哉

漢詩趣による苦澁の發見は、直ちに等類への運遷に進む。眼を轉ずれば、わび、さび、ひえ、と等類は、日本詩歌の傳統の支柱に存在してゐた。西行、心敬、宗祇、と結合して、芭蕉は共に己の學統と敬仰したのである。

誹諧の基本的規制は、五、七、五（七、七）と云ふ呪術にある。全面的眞實をば、一面的解釋に於て抽象化しての表現であるから、

組入れ切れぬ諸相を處理するに、常に一定の方向に釘付けされてしまふのである。談林の或る人々は、極端な、「字餘り」の作品によつて、この規制を外延から破らうと努力した事もあるが、結局、試みだけに終つてゐる。この規制の意味を別途より敷衍すれば、一定の方向とは、宿命とも云ふべき歴史的規制であつて、それは、日本文藝に傳統された或る精神を約束する事によつてのみ、開かれる窓であつたのである。談林の大部分の誹人達は、この事實に想ひ寄せず、外延部に於ける打開のみ努力を續けて、凋落して行つたのである。が、芭蕉は、打開し前進する爲の支柱を、漢詩趣からその等類に求め得て、ついにこの秘密を握り得たのであつた。そして、現實をこの抽象理念で救済しなくてはならぬと云ふ、素朴とも云ふべき第一歩を踏み出したのである。

「幽玄」それ自身は何んら自らを語つては呉れぬ。これを各自の天分によつて、限定して使用する時に、意義をもつものである。こゝに、芭蕉によつて誹諧への移行を受けた幽玄を、そのまゝ、蕉門の人々によつて説かれてゐる、わび、さび、であると主張するのはない。「春雨の柳」の世界を展開させて、「田にし取る鳥」こそ自己の新しい領域であると宣言してゐる事を無視するものではないが、第一歩を踏み出した頃の彼の追求した姿は、やはり中世幽玄の凝縮を前提として擲ひ上げられるものに限定されてゐた。そして、これを具現させた彼の世界は、不思議な風景と化して、人々の眼前に、突き出て來たのである。こゝに、俗説に従つて開眼の三句と稱されるものを並べてみる。

枯枝に鳥のとまりたるや秋の暮

道の邊の木槿は馬に喰はれたり

古池や蛙飛びこむ水の音

第一の句は、「枯木寒鳥」と題するシナ風の畫と想へば、解決するかもしれぬ。第二の句は、素丸の説く如く、消極的な處世訓なのかもしれぬ。が、第三の句は、誠に不思議な風景である。支考は、「葛の松原(元祿五年刊)」に於て、「芭蕉庵の叟、一日嗜焉としてうれふ。曰ク、風雅の世に行はれたる、たとへば片雲の風にのぞめるが如し。一回は白狗となり一回は白衣となつて、共にとゞまれる處をしらず。かならず中間の一理あるべし」と、考へて深川の庵に閉ぢこもつてゐると、貞享三年の春も暮れやうとする或る日、近くの

池に蛙の飛び込む音が、時々きこへて来た。こゝに、「言外の風情この筋にうかびて」、七五を得たのである。傍にみた其角が、山吹や、と云ふ冠を付けようと出しやばつたが、古池や、と定つた。「山吹といふ五文字は風流にして、はなやかなれど、古池といふ五文字は質素にして實也。實は古今の貫道なればならし」と、論じてある。越人の「俳諧不猫虻」に云ふ如く、この句に、「芦の若葉にかゝる蜘蛛の巢」といふ其角の脇が、本當に存在したのかは分明しないが、「李杜が心酒を嘗めて、寒山が法麩を嚼る」より、一步前進した場所に於ける句である。しかし、それは、後世の蕪村風の繪畫構圖の埒外に出てゐるものであるし、それかと云つて、主觀的情緒を訴へる文字は無いし、勿論、劇的な状態など絶無である。強いて云へば、自然の一角を切取つたに過ぎぬものである。それを、或る詩の一つの stanza として眺めるならば、それ程、稀有な姿ではないが、これは、まつたく、總體積がそれきりで、そして孤立してゐるのであるから、その文學的思考の内容を洞察する手掛りは、一應ないものである。幼兒の心をもつて接すれば、唯それだけの空虚な風景に過ぎぬ。が、そこに作者の冥想を感得し始めると、この句の意味するものは、段々と動搖し始めるのである。

これは、一種の duplicity の判斷禍であらう。語り手の志向するものは何か。それは、え云はぬものである。無絃の琴の調べであると答へる。すると、鑑賞家達の中世傳統への信仰心は、作者の思ふ壺通り、復しても遡洄して、わびを、さびを、其處に探し當てたと、報告するのであつた。四方八方に接觸した談林の喧しさの中より脱出して、幽玄に寄り掛る事により、語る煩はしさを除去する事が出来ると確信して、芭蕉の俳諧は、第二步を進め得たのであつた。

III

俳人井原西鶴に與へられた、「放埒拔群に勝れ」と云ふ批評は、誤らず、賞嘆の意に取れる。即ち、彼が他の誰よりも、多角的に、あらゆる題材の上に、俳諧の墨繩を打つた事を認めた語であると解する事が出来る。

不惑に達せざる頃の彼は、あらゆる現實を、俳諧に於て、語り盡せると信じてゐたのである。隨流の云ふ、放埒は、所謂、浮世ごと

を語る西鷄を批難する意味をも含んでゐるのであらうが、彼の語りたゞい對象は、そんな限定された狭い一界限ではないのである。例へば、此の頃行はれる誹諧のうち、百韻中に「四十五句、五十句は遊女の噂、歌舞妓芝居の風情、残る四十句は博奕わざ喰物等」である懐紙を、彼が輕蔑してゐる事でも、それを知り得るのである。そして、その語り方は、相手に明確な理解を要求し得る論理に立つてゐて、座中の誰にも解らず、「我ばかりうなづきて、一句／＼に講釋」するていの曖昧さの絶無を期してゐるのである。

延寶八年五月の、生玉本覺寺に於ける、四千句興業はかゝる用意の上に行はれたものであつた。しかも、指台見五人を招請してゐる事は、點者としての誇りの中に、これを遂行出来ると云ふ自信に満ちた、彼の姿を示してゐる。

この矢數誹諧に於て、確かに彼は、凡ゆる現實に接觸し、嵌入しようとなつてゐる。殊に、都會生活の因果を語つて、人間への詠嘆のにじみ出る作品は、安易な談林を一步、引放したものがあつた。

内證の苦は色かゆる目安書

十露盤上手といはれし我も

廿日きり今は法度の御觸にて」

繪草紙も下りを請て送り狀

心中の末は年寄女房

水性の性のおもはく波の皺」

油屋に半ば勤めて御暇

吾妻に下りて駕籠にても昇

氣がせくか關のこなたを夜の内に」

これらは、談林一般の智的な批判に終つてゐるものではない。諦觀にまとめ切れぬ情熱と感動が働いて織出された詩である。こゝには、統治者の下す政策が行動を規定し、貨幣の回轉によつてのみ生活が運行されてゐる因果が取上げられてゐる。町人と武士と、色子

と遊女が舞いてゐる人情が語られてゐる。が西鶴は、このまゝ進めば、凡ては語り盡せると何時までも信じ續けられたであらうか。答は、否定であらねばならぬ。誹諧の世界は、發句より脇、第三、第四と記述は進展して行くのであるが、前句と付句の間隙を連絡し埋めて行くものは、暗黙の類推が支柱となつてゐるのである。こゝから起る、すれは多かれ少なかれ、「一句／＼に講釋」する事を認めざるを得ない結果を生じるのである。所謂、「自註」の誹諧なるものの存在こそ、この間隙を端的に物語つてゐるのである。

西鶴の語りたかつた事は、その材料の擴充に伴つて、ついにこのすれにまで達して來てゐたのである。このすれとは何んであらう。それは、現實を誹諧化する過程に振り落ちてしまふ種々相であつた。こゝにこそ、彼が語り盡したいと焦燥した現實の基礎があつたのである。そして、この現實の基礎の相互關係、よつて來る因果を語る事に付隨する條件は、絶體に詳細でなければならぬ事である。この點に就いて、短句の集積は、如何に尨大でも、所詮この要望を満たすものではない事を、西鶴は、この頃に覺り得たのではないかと思はれる。他の要因を暫らく問はず、この點からのみ評し得るとすれば、貞享元年の二萬三千五百句の蠻勇は、西鶴の倨傲と云ふよりも、未練の行爲と云ふべきものを含んでゐると云へよう。

やがて、散文界に出現した西鶴が饒舌であつた事は、當然である。誹諧の振ひ落した因果の解説は、充分に語り盡されなくてはならぬ。現實の基礎を理解させる爲には、「今日のさかしき、くま／＼を探り求め」ねばならないのである。去來に教へて、「云ひおほせて何かある」、とうそぶく芭蕉は、この西鶴を、「淺間しくなり下れる姿」と觀たのであつた。芭蕉にとつては、正しくそうであつたであらう。此處を起點として、二人は對蹠點に向つて歩み出したのである。こゝに亦、二人を隔つ「異常」と「尋常」の世界が現れるのである。

「好色二代男」の成功によつて、記述し盡す事に、本領のある部署に就いた西鶴は、次々と、諸國の奇談、巷談、仕掛者のなす意外の作爲、隠されてゐた好色生活の詰開きなど、凡ゆる日常の俗に反する、「異常」にのみ情熱を示し出した。その「異常」は、散文の題材にのみ限るわけではない。例へば、傳統に反して、聖を俗にすり變へる、彼の批判も亦、「異常」と云ふべきものであつた。彼の批判は、ごく簡明に行はれてゐる。彼にとつて、三木三鳥は、「一夜を銀六匁にて呼子鳥、是傳授女なり。覺束なくてたづねけるに、風

呂者を猿といふなるべし」となし、源氏の君は、當代に云ふ浮世之介と解説を付して、批判し終へてゐる。そして、こゝに考へ得る事は、彼の諸作品は、當時の何人にも易々と透徹し理解されたものと思はれる事である。異常な事物の、その特殊な姿を鋭角的に切取つて示し、人生の或る特別な場合にのみ適用される種類の才氣や、機智を盡しての彼の饒舌は、何んらの準備をも讀者に要求しないものがある。唯、讀めばよいのである。その解説は、隅々にまで行届いてゐたのである。傳統の文藝に暗い人々と云へども、もと／＼その約束に立つ事を條件としない世界であるから、少しも理解への困難はないのであつた。所謂、誹諧的手法の大部分は syntax の問題に屬するに過ぎぬ。まして、云ふところの古典の parody より成る字句は、西鶴の諸作の根本要因とは、縁の遠い存在である。「異常」の種子は、談林誹諧に既に指摘出来るかもしれぬが、この種子は、彼が散文界に移植する事によつて、驚くべき絢爛たる花を咲かし得たのである。

芭蕉の世界は、これと對蹠してゐた。彼の世界は、偶發的ではなく、誰もが常に見るもの、聴くもので、ほとんど運命的とも云ふべき類性的瑣事から出發する事を、人々に教へてゐる。彼は、些の「異常」のない環境に沈潜する事に於て、自己の誹諧は發足する事を語つてゐる。そして、如何なる場合にも、「誠をせめる」と云ふ堅實なリアリズムから離れる事を許さず、その發展は、常に、「此の一筋につながる」傳統の信仰に規定されてゐたのである。そして、彼の安住の地と定めた、「尋常」——田園風の平凡さは、決して冗漫、單調なものではなく、そこにこそ刮目すべき藝術的飛躍が内在してゐるのだ、と彼は確信してゐるのである。確かに、これこそ談林を一步抜け出た、より新しい彼の風雅であつたのだつた。

ほとんど時を同じくして出發した二人は、異なる道程に進み出した。が、西鶴の詳細な解説のある「異常」は、意外にもその理解は易しいのであるが、芭蕉の語らない「尋常」は、その茫漠さの爲に、これを理解する爲には彼の蔑視した饒舌を、多分に必要とさせるものであつた。

IV

貞享元年六月、住吉の神前にて興行した、西鶴の獨吟二萬三千五百句は、誠に破天荒の放れ業であつた。この早口に従ふ者は、今後永久に絶無であらう事は、彼自身も確信し、衆人も認めざるを得なかつたものと思はれる。彼は、それ以來しばらく誹壇から遠ざかつてゐる。その間の理由を推察して、何人によつても登攀不能の金字塔を築き上げた事に満足して、散文界に専心、身を挺したと説く事は、たぶん當つてゐるやうに思はれる。數多い小説の刊行と、ほとんど無に近い誹諧方面の資料が、これを物語つてゐるやうである。彼が、再び誹壇にその姿を現はして來たのは、元祿三、四年、齡も知命に達した頃であつた。殊に「石車」の刊行に於て、相手を驚さんといきり立つ、彼の盛んな英姿が見出されるのである。

「石車」(元祿四年刊)は衆知の如く、團水の「特牛」につゞく、可休の「誹諧物見車」への論駁の書である。點取歌仙の問題は、標的となつた點者の無知無學を嗤ふ、爲にする隱險な策謀であり、當時の誹壇の小さな覇道に過ぎぬものであるが、これを一段と掘下げると、その根底には鑑賞の問題と相關した、重大な材料が伏在してゐるのである。それは殊に、短詩形の場合に現れると極端になり、屢々、同一文字が鑑賞者の異なるにつれて、絶讃と、排効を同時に受ける結果が起り得るのである。可休の處業の原因が何邊にあつても、行き着く處は、單なる式目や學識の問題を越えた、批判の陥穽に結びつく問題であつたはずである。

この毒矢の的に西鶴も擬せられてゐる。その頃の彼は、年齢のさせる業であらうか、往年の不羈奔放な觀念の躍動を潜め、散文に現れた處をみても、胸算用、織留の境地に辿り着いてゐたのである。彼は、鋭い筆鋒で相手を論駁してゐる。その論據とする文献を明示して學識を語り、式目への確固たる智識を述べて、點者として微動だにもせぬ位置を誇示してゐる。が、結局それきりの範圍で終つてゐる。勿論、これだけで充分、「石車」に於ける西鶴の任務は完遂されてゐるのであるが、この記述の背後に隠れてゐる、西鶴の心境を窺ふと、この頃、既に彼は、誹諧は傳統する式目の内のもので、それ以上に出づべきものではないと云ふ結論に達してゐたのではな

からうか。今、この説明を彼自身にさせると、こゝに「織留」の一章が浮び上つて來るのである。

時に連歌の掟をゆるかせにして誹諧といふもこれ哥道の一味なり。むかしは世を隙になす人あるひは神主又は武士のもてあそびにして有けるを、ちかき年世上にはやり過人のめしつかひの小者下女までもいたさぬといふ事なし。惣して藝事すゑ／＼の手に渡りて捨れるためし有。昔日の誹諧師は哥書大かたに見わたり、道しる人に禮式を習ひ貴人法體の下座に付、諸事宗匠の下知にまかせて心にまことあれば自然と神慮に叶ひぬ。いつれの連衆にてもよるしき付句をいたされし時は、座中肝にめいじ我もおぼえず同音に覺て、持扇のはしに書付好る人に是を聞せける。また點取の巻しつつかはしけるに、其比の點者は百韻一句／＼聞かたを脇書にして明白也。又作者も俳道のわきまへあつて、すこしのさし合同字見おとしの吟味をとげて、たがひの執行になしぬ。

この短篇一章の約半分を費して述べられてゐる彼の論點は、確かに、「牛は闇に二句嫌ふか」の類の似非點者に對する批難であらうが、その背後に隠れてゐる論據は、結局誹諧は、嚴重な式目によつてのみ守護され保たれる城である事を認めた記述ではなからうか。規制に對し無知であつたり、故意に規制を無視したりする、「すゑ／＼の手に渡」る事は、誹諧の自壞に等しい事を、表明してゐるのではなからうか。眞疑は尙未詳であるが、談林の放縱を慨嘆して再び連歌に還つた、と云はれる宗因の晩年にも一味通ずるものが、そこに見出されるのである。

こゝに「石車」と同年の刊行になる、齋藤賀子撰の「運實」に入集した、彼の句をあげてみよう。

蟬聞て夫婦いさかひはつる哉

笹ふく人留守とはかほる運哉

玉笹や不斷時雨るゝ元箱根

これらの句は、蕉風に親近して來た晩年の西鶴を示すと云ふ解説よりも、誹諧のもつ宿命的な、傳統に對する敗北を認めた、彼の諦觀を示すものと云ふべきものであらう。

他方、「石車」刊行の頃の芭蕉は、既に一世の宗匠として、その新風は全俳壇を風靡せんとしてゐた。そして、把握した手法は發展して、「猿蓑」にまで達してゐたのである。彼の手によつて俳諧の座に移行された中世文藝の傳統は、靜かに燃焼を續けて、正しく光り輝き出したのであつた。「流行」は、さび、しをり、ほそみの方向に歩み續け、一世の俳諧は皆、幽玄、閑寂の味を、一應具へたものに進んで來た。確かに、これは、彼の意圖に反するものではないのだつた。が、それには文藝の創作を誤らず、重大な盲點を藏してゐたのであつた。即ち、芭蕉の指す現實を直ちに、抽象的な理念によつて解釋すると、その形象設定に當る時、屢々この現實を自己の前提する抽象理念の發現であると觀てしまふ事である。これでは現實は、主體的に把握される事はなく、一つの抽象に還元されて終るのである。作家自身の俳諧は無く、幽玄の彷徨する姿をのみ追ふに過ぎないのである。芭蕉は、さすがにこの陥穽の恐ろしさを覺つてゐた。「松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へ」云々と云ふ「三册子」に傳へられてゐる詞は、現實の觀照が絶體の要件で、抽象理念を通じて對象を觀る誤りを戒めた、彼の深い思考を示すものである。が、彼の追従者は、皆この弊を覺つてゐたであらうか。後年、子規の痛罵した所謂「月並」は、芭蕉を源として安易に流出した中世傳統の精靈を云つたものであつた。

亦、彼の晩年に達した最高の境地として、「輕み」なる場所が説かれてゐる。彼が、去來に教へた比喻によると、「梨子地の器に高蒔繪」をした如きものではなく、「桐の器をかき合せ」塗りにした如く、「ざんぐりとあらび」た美をもつものであると云ふのである。誰よりも自己の俳諧の盲點を知つてゐた彼は、中世文藝の理念を、より俗に擴充する必要を痛感した爲の詞である。そして、「高くこゝろをさとりて俗に歸る」と云ふ「輕み」は、俗の中に溶解した傳統が、やがて、一段と飛躍し出す事を期待した詞であつたのだ。確かに、彼のこの方向は、まったく正しいのであるが、さて、これを作品に具現させて進展する困難さは、彼の期待を裏切らなかつたであらうか。

木のもとには汗も膾もさくら哉

梅が香にのつと日の出る山路哉

芭蕉の「輕み」が、單に語や趣向にのみ存するだけのものではない、と云ふ解説を了解したとしても、かゝる通俗への擴充は、俳諧

に於ては支那の平俗を越えて、ついに、その餘りの凡俗さ加減で、文藝作品とは云ひ得ない一茶の或る種の作品に至らしめてしまふ宿命を、芭蕉はこの頃より豫想し得たであらうか。

俳諧の傳統的宿命を諦観して、散文界に於ての解決を期した西鶴も、傳統の含蓄するものを自己の一單位と確信し、その周圍を置き換へる努力を續けた芭蕉も、共に文藝の解決しきれぬ苦惱を残したまゝ、ほとんど時を同じくして、元祿の世から消え去つて行つたのである。